

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2019.12) 令和元年度:41-42.

A大学看護学生の社会人基礎力の実態

石川 遥菜, 榎本 いずみ, 原田 妃奈

A 大学看護学生の社会人基礎力の実態

石川遥菜 榎本いずみ 原田妃奈
(指導：及川 賢輔)

緒言

社会人基礎力とは経済産業省から2006年に提唱された職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力であり¹⁾、「アクション」「シンキング」「チームワーク」の3つの分類とその下位概念である「主体性」「働きかけ力」「実行力」「課題発見力」「計画力」「創造力」「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」の12能力要素から構成される²⁾。社会人基礎力は何らかの経験を積むことにより伸長する性質を持ち、社会人としての就労経験により伸長することが確認されている³⁾。看護系の教育カリキュラムにおいて、文部科学省は大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会を発足し、2011年に「学士課程版看護実践能力と到達目標」として、5つの能力群と20の看護実践能力を明示している⁴⁾。A大学においてもカリキュラムの見直しが行われ、2012年より新カリキュラムが導入されたが、学年間の社会人基礎力を比較し、カリキュラムの検証を目的とする研究は未だない。また、社会人基礎力の研究は、看護基礎教育の領域においては徐々に増加しているが、4年生の看護系大学におけるすべての学年を比較検討した研究報告もない。そのため、本研究は、学年間の社会人基礎力比較を通して、能力醸成の実態を明らかにすることを目的とした。

方法

【研究対象】平成31年度A大学に在籍している看護学生1~4年生。

【データ収集方法】対象者に対し、調査の趣旨、方法、倫理的配慮等を説明し、無記名自記式調査票を用いた質問紙法による調査を行った。

【調査内容】調査票の質問項目は経済産業省²⁾が開発し、北島¹⁾によって信頼性・妥当性が検証されている「社会人基礎力レベル評価基準表」に基づき作成し、6段階リッカートスケールにて評価した。その尺度は『前に踏み出す力(アクション)』『考え抜く力(シンキング)』『チームで働く力(チームワーク)』という3つの能力尺度に分類され、『前に踏み出す力(アクション)』は「主体性」「働きかけ力」「実行力」、『考え抜く力(シンキング)』は「課題発見力」「計画力」「創造力」、『チームで働く力(チームワーク)』は「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」という能力要素で構成される。また、対象者の属性と社会人基礎力に影響を及ぼす可能性のある要因(性別、学年、クラブ活動参加の有無、アルバイト経験の有無、一人暮らしの経験の有無、祖父母との同居の有無)に

ついても調査を行った。なお上記尺度は、開発者から使用許可を得て使用した。

【データ分析方法】選択肢を1点、2点、3点、4点、5点、6点とし、「社会人基礎力レベル評価基準表」全項目の得点総計を個人の社会人基礎力、個人総計得点の平均を学年全体の社会人基礎力として、学年ごとの社会人基礎力を比較・分析した。また、学年ごとに属性と社会人基礎力の関係を解析した。平均値の有意差検定には、2群間比較にMann-WhitneyのU検定、3群以上の比較にはKruskal-Wallis検定を用い、有意水準は5%未満とした。統計ソフトはSPSS ver. 22を使用した。

【倫理的配慮】文書と口頭で本研究の目的・方法・所要時間等の説明を行い、調査票の記入・提出をもって本研究への同意とすること、研究への参加は自由意志であり不参加でも不利益はないこと、データは本研究実施以外には利用せず、研究終了後、紙データはシュレッダーにて破棄することを説明した。

結果

回答は181名(1年生42名、2年生44名、3年生47名、4年生48名)から得られた。社会人基礎力総合得点は、1年生が2年生と比較して有意に高い結果となった(図1)。下位概念について分析してみると、2年生より有意に高かった1年生の能力は、『前に踏み出す力』『チームで働く力』の2つで、能力要素では「主体性」「働きかけ力」「創造力」「発信力」「傾聴力」「柔軟性」において高い結果となった。

その他学年間で差が認められた能力要素は、「柔軟性」と「ストレスコントロール力」で、3年生が2年生より有意に高い値を示した。

またどの学年であっても、12の能力要素のうち、「創造力」と「計画力」が低く、それらを含む能力である『考え抜く力』のスコアが低い傾向にあった(図1)。

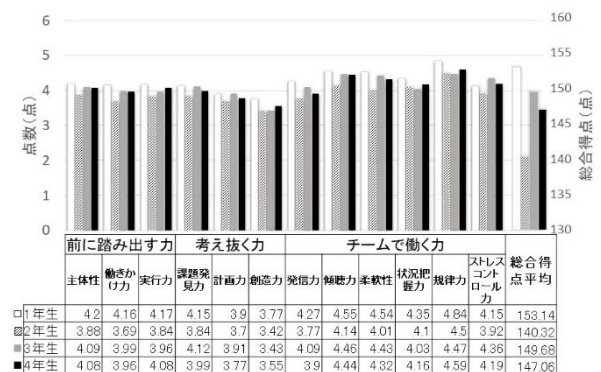


図1 12の能力要素学年別比較

期待された学年進行による段階的**社会人基礎力**の増加は認めなかったが、全ての**実習過程**を終了した4年生と、本格的な**臨地実習**を経験していない2・3年生の**社会人基礎力**を比較すると、4年生の方が、**社会人基礎力**が高い傾向がみられた。

さらに**属性**と**社会人基礎力**の関連について分析してみると、女性の『**チームで働く力**』のスコアが、男性に比して有意に高い結果となった。また、一人暮らしをしている学生のほうが、『**考え抜く力**』は有意に高かった(表1)。

属性		総合点		前に踏み出す力		考え抜く力		チームで働く力		
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
	総数	N=181	147.51	18.87	36.03	5.18	34.15	5.61	77.33	10.54
性別	男性	N=10	148.06	18.81	36.18	4.98	34.16	5.62	77.70	※10.52
	女性	N=171	138.10	17.33	33.00	7.17	34.00	5.42	71.10	8.75
現在クラブ活動	有	N=160	147.71	19.16	36.19	5.32	34.14	5.67	77.38	10.70
	無	N=21	146.05	16.37	34.86	3.77	34.19	5.09	77.00	9.25
アルバイト経験	有	N=168	147.42	18.96	36.13	5.19	34.21	5.63	77.09	10.50
	無	N=13	148.69	17.64	34.85	4.83	33.38	5.28	80.46	10.59
一人暮らしの経験	有	N=117	149.45	18.03	36.26	5.00	34.78	※5.34	78.42	10.10
	無	N=64	143.97	19.83	35.63	5.47	33.00	5.88	75.34	11.04
現在祖父母との同居	有	N=16	139.63	21.61	34.50	5.06	32.38	5.49	72.75	12.43
	無	N=165	148.28	18.40	36.18	5.17	34.32	5.59	77.78	10.23

表1 属性別の**社会人基礎力** ※p<0.05

考 察

今回、予想以上に最低学年である1年生の**社会人基礎力**が高いという結果が得られた。本年度の1年生より新カリキュラムが導入され、グループ学習の機会が増えたことなどもあり、実際に**社会人基礎力**が高い可能性もあるが、1年生は**臨地実習**未経験であり、自身の能力を発揮し、十分に自己評価をする機会が少ないため、過大評価した可能性も考えられる。前述した12の能力は講義や演習だけで成長させることは困難であり、**臨地実習**での経験も踏まえて実践的に身に付けられる能力である。

また、**臨地実習**を経験した4年生において他学年と**社会人基礎力**の有意差がないのは、本格的な**実習**が始まると、多重課題や複数患者の受け持ち等、自分の考えた計画通りには進まず、思い描いた理想の看護ができずに、自信喪失し、自身の能力を過小評価した結果であることが推測される。

しかし、有意差はないものの、4年生では2・3年生と比較し、**社会人基礎力**が高くなっていることから、**実習経験**が**社会人基礎力**向上に何らかの影響を及ぼしている可能性は否定できない。**社会人基礎力**とは、臨床の現場で向上するという特性を持つ能力であるため²⁾、現行カリキュラムのように各学年で**臨床実習**を取り入れることは重要であると考え。チームで働く力において、男女間に有意差があるという結果は、先行研究でも同様の結果が出ている⁶⁾。しかし、その原因は未だ明らかになっていない。

本研究で用いた尺度は、自己評価に基づくものであり、その客観性について諸所で議論がみられる。自己客観視の未熟さによって自己評価と他者評価の差異が生じる可能性がある。よって、真の能力を反映しているかどうかについては、慎重な考察が必要であるが、今回用いた尺度は十分なサンプル数により、妥

当性と信頼性が証明されているため、アンケート採取時の状態を一定に調整することで、有用な尺度として利用可能と考えられる。本研究は横断研究であり、同一時期の異なる母集団(異なる学年)で比較していることから、集団背景の影響を排除できない。したがって、現在のカリキュラムが適切に学生の**社会人基礎力**を醸成しているかどうかを評価するには、一定の限界があると考えられ、将来的には、入学時から卒業時まで継続して調査する縦断研究を行うことが必要である。

結 論

A大学の看護学生の**社会人基礎力**は、学年別にみると、1年生が2年生より有意に高い結果となった。また、**社会人基礎力**と**属性**の関係においては、男性より女性のほうが『**チームで働く力**』が有意に高く、一人暮らしを経験している学生のほうが『**考え抜く力**』が有意に高かった。しかし、自己評価尺度を使用した横断研究の限界を考慮すると、本研究の結果から、真の**社会人基礎力**とカリキュラムの評価を行うのは困難であり、今後さらなる研究が必要である。

引用・参考文献

1. 社会人基礎力：経済産業省ホームページ：
<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/2019.4.23>
2. 北島洋子, 細田泰子, 星和美：看護系大学生の**社会人基礎力**の構成要素と属性による相違の検討, 大阪府立大学看護学部紀要, 17(1), p13-23, 2011.
3. 「2017年病院看護実態調査」結果報告：病院看護職員の離職率の推移：日本看護協会広報部, 2018.
4. 文部科学省：大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会最終報告, 2011, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf, 2019. 4. 23
5. 箕浦とき子, 高橋恵：看護職としての**社会人基礎力**の育て方 専門性の発揮を支える3つの能力・12の能力要素, 第2版, 教文堂, 2018.
6. 大岡裕子, 吉永純子, 鈴木英子：大学病院に勤務する看護師の**社会人基礎力**に関連する要因の分析, 日本看護管理学会誌, 21(2), p87-97, 2017.
7. 山下順子：新人看護師教育における**社会人基礎力**育成研修の評価, 山口医学, 67(1), p5-13, 2018.